

# 朝見遺跡(第5次)発掘調査 現地説明会資料

～松阪市立田町・和屋町～

2014.9.6 三重県埋蔵文化財センター



2号鏡 瑞花双鳥八稜鏡 10世紀後半 (直径8.5cm、重さ37.5g)

2号鏡は八つの稜をもつ花形の鏡で、1号鏡に比べて薄手のつくりです。内区には唐草文の一種である瑞花文と2羽の鳥(鳳凰)が配されます。外区の唐草文は点文となって形骸化しています。紐座はありません。長野県吉田川西遺跡、阿弥陀堂遺跡などに類似例があります。八稜鏡の出土は県内24例目(発掘調査では4例目)です。



3号鏡 素文鏡 時期不詳 (直径7cm)

鏡背面の文様がない、非常に薄手の鏡で、儀礼用の鏡であると考えられます。鋳により著しく劣化しています。外縁は平たく、紐は半球形のしっかりしたもので、形の特徴などから弥生時代終末期～古墳時代の鏡の可能性があります。

調査遺跡名：朝見遺跡(第5次)、中坪遺跡(第2次)  
所在地：三重県松阪市立田町・和屋町  
調査面積：約9,900m<sup>2</sup>

原因事業名：高度水利機能確保基盤整備事業(朝見上地区)  
調査実施機関：三重県埋蔵文化財センター  
調査期間：平成26年4月21日～平成26年12月8日(予定)



鏡の各部名称と意匠



1号鏡 瑞花円鏡 10世紀後半 (直径10.5cm、重さ191g)

朝見遺跡は、柳田川左岸の平野(標高4～7m)に営まれた縄文時代から中世の広大な遺跡です。周辺には、条里地割とよばれる古代以来の耕地区画がよく残っています。また当地は、南に京と斎宮を結ぶ古代伊勢道、北に中世の参宮古道が通過する交通上の要地でした。

これまでの調査(第1～4次)では、平安時代の大溝や井戸などから、緑釉陶器の優品や木製祭祀具、役人などが用いた石製の帶飾り、墨書き土器など、当時の高級品や珍しい遺物が多数出土しました。このことから、役所など公的な施設の存在や、斎宮あるいは貴族などの有力者が経営に関わった可能性が高いと考えられています。

今回の調査(第5次)では、平安時代の大溝から、青銅製の鏡が3面見つかるという大きな成果が得られました。このうち、1・2号鏡は平安時代後期(10世紀後半)に製作されたものです。1号鏡は外縁が三角縁、外区に唐草、内区には瑞花文の花を省略し、葉のみを描いています。紐座は花形座。こうした意匠の円鏡は、全国的にも非常に珍しいものです。





### 県内初!鏡を用いた水辺の祭祀跡を発見!(平安時代後期)

鏡の出土地は朝見遺跡の最も南側で、大溝の下流側(北西約1km先)では、大量の綠釉陶器や木製祭祀具が出土した大溝や、ウマの歯が出土した祭祀跡が見つかっています。また、東側には平安時代の集落跡である大蓮寺遺跡があります。大溝の規模は幅約6m、深さ約1mで、南から北へ向かって流れています。

1・2号鏡は、大溝の東岸、最上層で、ともに鏡面を上に向けて並べられていました。溝の上層は粒子の細かい土、下層は粒子の粗い砂や礫が堆積しており、比較的激しい水流だったものが、徐々に水流が弱まり、埋まっていったようです。このような鏡の出土状況から、大溝の流れが弱まった際に、鏡を擧げて水を求める神まつり(雨乞いや水乞い)が行われたのではないかと考えられます。

三重県内では、平安時代以降の鏡は60ヶ所から約160面見つかっていますが、多くが宗教的な場所から出土したもので、朝見遺跡のように、墓や経塚のない集落跡から複数の鏡が見つかるのは極めて稀です。また、溝からの鏡出土例は、県内初となります。古代の鏡の使い方や祭祀の様子を具体的に示す、全国的にも貴重な事例です。

朝見遺跡は、平安時代に櫛田川下流域の耕地開発を推進した有力者が関わった遺跡であると考えられています。田畠に水をもたらす溝で、当時の貴重品である鏡を用いた祭祀が行われていたことは、この説をさらに補強するものといえます。



一方、3号鏡は大溝の最下層から出土しました。溝上層からは平安時代の土器が出土しましたが、下層は弥生時代終末期～古墳時代初頭(2～3世紀)の土器がほとんどで、わずかに古墳時代後半(5～6世紀)のものが含まれます。これらの土器は、水流により表面が磨耗していることや、付近に同時期の遺構がないことからみて、3号鏡とともに上流の琵琶垣内遺跡などから流されてきた可能性があります。

別の調査区では、弥生時代終末期の方形周溝墓や古墳時代の大溝が見つかっています。朝見遺跡の付近では、平安時代よりも前に、鏡を用いた水辺の祭祀が行われていたのではないでしょうか。

